［認知症対応型共同生活介護用］

1. 評価結果概要表

作成日　2009年5月1日

【評価実施概要】

事業所番号	2693100022
法人名	株式会社　キャビック
事業所名	キャビックケアホームすぃーとハンズ向日
所在地	〒617-0006　京都府向日市上植野下川原46-4 （電　話）075-925-1267

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル海湊町83-1　ひと・まち交流館　京都1階		
訪問調査日	平成21年3月2日	評価確定日	平成21年5月10日

【情報提供票より】（平成　21　年　2　月　10　日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	平成　20　年　1　月　20　日	
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計　18　人
職員数	16　人	常勤　12 人，非常勤　4 人，常勤換算　16.0　人

（2）建物概要

建物構造	鉄骨造り
	3 階建ての　2階～　3 階部分

（3）利用料金等（介護保険自己負担分を除く）

家賃（平均月額）	平均　82300　円		その他の経費（月額）	円
敷　金	有（　円）		○無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	○有（36万円　） 無		有りの場合 償却の有無	償却有
食材料費	朝食	400　円	昼食	700　円
	夕食	800　円	おやつ	100　円
	または　1日あたり　円			

（4）利用者の概要（　2　月　10　日現在）

利用者人数		17 名	男性　0 名	女性	17 名
要介護1		2　名	要介護2		4　名
要介護3		6　名	要介護4		5　名
要介護5		0　名	要支援2		0　名
年齢	平均	84 歳	最低	71　歳	最高　92 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	川勝内科医院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

タクシー業務をしてきた法人が社会貢献への思いから高齢者介護事業に取り組み、向日市の要請で立ち上げたグループホームである。小畑川と物集女街道の間の静かな住宅街にあり、1階が小規模多機能型居宅介護事業所である。あたりは竹やぶなど自然が豊かに残っている。敷地内に足湯や畑があり、利用者の楽しみである。洋風建築の内部は広くゆったりしており、居室には利用者が使い慣れた家具や道具が持ち込まれ、個性的な部屋になっている。家族との関係が良好で、家族の面会頻度も多く、利用者を連れ出したり、外泊したりしている。開設1年であるが、管理者交代があり、現在運営面とケア面を見直し、基礎を確立していく努力を続けている。管理者は経験が長く、認知症ケアに力をもっており、職員と一緒に進めていく姿勢で取り組んでいる。その結果、施錠しない、食事が手作りで家庭的、外出が多いというグループホームらしいケアが実現している。正規職員率が高く、年代がさまざまな職員は経験の長い人も多く、明るく、楽しく業務をしている。利用者の希望をかなえたいと利用者と一緒にその方法を考えるなど、職員は前向きである。

重点項目①

前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）

今回が第1回目の受審である。

今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）

今回の評価にあたって自己評価はそれぞれのユニットごとに職員が意見を書いてそれをまとめている。職員は評価の意義を認識している。

重点項目②

運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）

要綱を作成し、2カ月に1回開催し、記録が残されている。メンバーは利用者、家族、自治連合会会長、民生児童委員、民生委員協議会会長、社会福祉協議会会長、向日市高齢福祉介護課課長、地域包括支援センター職員である。地域の情報をもらったり、行政や地域包括支援センターの思いや予定していることの情報をもらう場になっている。意見がないので改善点は見られない。

重点項目③

家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）

家族会が立ち上がっており、2カ月に1回開催されている。10家族くらいが毎回参加されている。家族の最大の関心は、このグループホームで最期まで看てもらえるのかということである。事業所からは転倒のリスクを理解してもらう話をしている。家族同士も事業所としても、認知症のケアのたいへんさを話し合い、共感し合っている。

重点項目④

日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）

向日市の要請を受けて開設した事業所である。開設にあたって説明会をしており、オープンのお披露目には市会議員、名士、ケアマネジャーなどの他、地域住民が大勢来訪している。フラダンスショーや地域の障害者共同作業所がつくったパンの販売、フリーマーケットなどの春祭りを開催したところ、大勢の地域住民が来訪してくれている。物集女の老人会から見学の申込がある。今後は地域の小学生に「認知症のおばあちゃん」を知ってほしいという取り組みを予定している。

社団法人京都ボランティア協会2008

2. 評価結果（詳細）

（ ▒ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	「慈しみをもって寄り添い、その人らしい生活がこの地域で送れるように支えます」という理念を掲げており、パンフレットに明記し、玄関に掲示している。家族には契約のときに説明している。開設1年後には、職員とともに理念を考えたいと、アンケートをとっている。それぞれが自分の言葉で理念を提案している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念は職員にとって自分のものとするにはなかなか困難な面もあった。しかし、現在ほとんどの職員が自覚しており、業務のなかで実践しようとしている。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	向日市の要請を受けて開設したものでオープンのお披露目には名士などの他、地域住民が大勢来訪している。フラダンスショーや地域の障害者共同作業所がつくったパンの販売、フリーマーケットなどの春祭りを開催したところ、大勢の地域住民が来訪してくれている。物集女の老人会から見学の申込がある。今後は地域の小学生に「認知症のおばあちゃん」を知ってほしいという取り組みを予定している。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の評価にあたって自己評価はそれぞれのユニットごとに職員が意見を書いてそれをまとめている。職員は評価の意義を認識している。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	要綱を作成し、2カ月に1回開催し、記録が残されている。メンバーは利用者、家族、自治連合会会長、民生児童委員、民生委員協議会会長、社会福祉協議会会長、向日市高齢福祉介護課課長、地域包括支援センター職員である。地域の情報をもらったり、行政や地域包括支援センターの思いや予定していることの情報をもらう場になっている。まだ意見がないので改善点は見られない。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	長岡京市の利用者もあり、向日市のみならず長岡京市の担当者とも話す機会をつくっている。共催事業はない。	○	市との共催で、介護相談や認知症研修会、認知症サポーター研修会、福祉用具の説明会等々を行い、講師となり、事業所の専門性を地域貢献することが望まれる。
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	広報誌はこれから発行する予定であり、家族へは電話や口頭で利用者の状況を報告している。法人のホームページに当事業所のページがあり、またブログには利用者の写真や状況報告が書かれている。家族の面会は毎日来る人、毎週来る人、月1回以上来る人など、熱心である。その際に情報交換している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会が立ち上がっており、2カ月に1回開催されている。10家族くらいが毎回参加されている。家族の最大の関心は、このグループホームで最期まで看てもらえるのかということである。事業所からは転倒のリスクを理解してもらう話をしている。家族同士も事業所としても、認知症のケアのたいへんさを話し合い、共感し合っている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	グループホームは利用者と職員のなじみの関係を重視するため、法人内異動は行わない方針をもっている。開設以来退職が3人あり、家族には口頭で伝えている。離職を防ぐ工夫としては、話をじっくり聞く、研修は日勤帯で派遣するなどに取り組んでいる。		
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修計画はなく、外部研修については情報を提供し、受講を促している。この1年間、内部研修、外部研修ともにほとんど実施できていない。資格取得については支援しており、合格後は資格手当てが支給される。一人ひとりの職員には自己評価票を記入してもらい、達成状況を点検している。	○	系統的な研修計画を立て、実施するとともに、外部研修も積極的に受講すること、特に認知症ケアについては最新の情報を研修していくことが求められる。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	これまで同種事業所との交流はできていない。地域包括支援センターの声かけで、乙訓地域2市1町のグループホーム協議会が立ち上がることになっているので、交流を期待している。	○	他の法人のグループホームを見学・交流したり、交換研修したりすると、職員にとっては「目から鱗」の刺激となり、力がつくので、実施することが望まれる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用前には利用者と家族に見学に来てもらっている。利用者には雰囲気を十分知ってもらうようにしている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は利用者を敬う気持ちを大切にしながら、利用者を好きになりたいと思っている。料理の好きな利用者には台所仕事をしてもらっていたが、だんだんできなくなってきて、それでも台所に立ってもらっている。夫だと思われている男性職員は常に話を聞くようにし、眠れないときは添い寝している。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の生活歴や趣味・嗜好の情報を収集しているが簡単な内容である。グループホームでの生活について、利用者や家族の意向は「穏やかにくらしたい」など、漠然としたものが多い。	○	長い人生を過ごしてきた利用者が最期のときをこのグループホームで過ごすということを考え、利用者や家族が意向をなかなか表明できなくても、利用者の生活歴、趣味・嗜好をなるべく詳細に聞き出し、生きがいのある生活の支援をすることが望まれる。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	利用申込書には利用していた介護サービスの情報、医療情報、薬情報、診断書、看・介護サマリー等々の情報を収集し、フェイスシートが残されている。利用が始まると担当職員を決め、1カ月後にアセスメントし、カンファレンス会議で介護計画を検討し、ケアマネジャーと管理者で介護計画を作成している。利用者の状況はカンファレンス会議で検討されている。	○	グループホームでの利用者の暮らしについて、利用者や家族からなるべく具体的な意向を聞くとともに、身体介護のみならず、生きがいがもてるような生活になるように、楽しみなどを入れたプラス志向の介護計画を職員全員で考えることが望まれる。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	ケア記録は毎日時間をおって記録され、職員のサインが残されている。記録は利用者の行動がほとんどであり、介護計画の項目にそったものではない。介護計画の評価が残されていない。	○	ケア記録は介護計画の項目にそったものにし、ケアを実施したのかどうか、実施した結果利用者の表情や発言はどうか、実施できなかった場合はその理由等を記録に残し、モニタリングの根拠とするとともに介護計画の評価をすることが望まれる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
3. 多機能性を活かした柔軟な支援（事業所及び法人関連事業の多機能性の活用）					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	理美容は訪問美容を利用している。併設の小規模多機能型居宅介護事業所の利用者とは交流があり、畑作業や花植え、イモ堀り等を一緒にしたり、バーベキューを一緒にしている。フラダンスショーやフリーマーケットなどの春祭りは共同で行っている。小規模多機能型居宅介護事業所のお風呂に一緒に入ったり、1階にある足湯を共に楽しんだりしている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力内科医が毎月往診してくれており、全利用者の状況を把握している。往診の結果は記録に残すとともに家族に伝えている。皮膚科、整形外科、外科等の受診は家族が連れて行くが事情によっては受診に同行している。医師とはサマリーの交換をしている。歯科医も希望すれば往診してもらえる。認知症専門医とは状況により相談している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	「医療連携との連携内容と利用者が重度化した場合の指針」というものが明文化されており、基本方針としてターミナルケアは行わないとなっている。利用者や家族には説明し、同意書をとっている。利用者や家族はまだ明確な意向は表明できない人が多い。		
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 1. その人らしい暮らしの支援 （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	居室のドアは鍵をかけることができ、かける人もいる。トイレの戸も鍵をかける人がいる。トイレ誘導等の声かけは注意している。法人のホームページや広報誌に写真を掲載する件について、契約時に利用者・家族に承諾書をとっている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	昼食は12時ころ、夕食は6時ころから一緒に食べているが、起床や就寝は自由なので、朝食は利用者によって食べる時間がバラバラである。夕食後もすぐ寝る人や遅くまでテレビを見ている人もいる。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は利用者の希望や食材によってその日に決めている。ユニットごとに異なる献立である。食材は配達と職員が利用者と夕方に買い物に行っている。食べ慣れた和風献立である。利用者も調理、もりつけ、配膳、下膳、食器洗い等を行っている。料理の苦手な職員のときは利用者がさりげなく支援している。鍋料理やホットプレートのやきそばもしている。職員もともに食べながら、利用者同士も会話が弾んでいる。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	少し大きめの家庭風呂でゆったりしている。週に3～4回の入浴で、時間帯は午前も午後も希望に応じており、夜間に入りたい希望があれば対応している。時には1階にある小規模多機能型居宅介護事業所の大きなお風呂に利用者の希望により入ることもある。希望者には同性介助している。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	野菜を切ったり、お米をといだりの調理の準備、かわいいデザインのちりとりとほうきを使っての掃除、洗濯物たたみ、洗濯物干し、ミシンでぞうきんやバスマットを縫うなどの役割を利用者は果たしている。オセロ、百人一首、いろはかるたなどの遊び、将棋や碁、風船バレー、カラオケ、おじゃみ、テレビのサスペンスを見る、大正琴や詩吟、生け花や花を育てる等々の楽しみを支援されている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	気候が良く、天気が良ければ毎日のように散歩に出かける。春の花見や秋の紅葉狩り、仁和寺や千弥農園、亀岡のコスモス園など、季節ごとの行事外出も盛んである。またガストや京都エミナースへの外食にも出かけている。利用前におけいこしていた詩吟のサークルに利用者をお連れするという個別外出も行っている。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	エレベーター前の柵、エレベーターのドア、玄関ドア等、すべて施錠されていない。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消火器、感知器、通報機、スプリンクラーを備え、消防計画を提出し、防火管理者を置いている。大災害に備えて備蓄を準備することと地域との連携について話し合うことが期待される。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者一人ひとりに毎日の食事摂取量と水分摂取量の記録が残されている。献立のカロリー値や栄養バランスについて、1カ月に1回くらい点検し、記録に残すことが期待される。		
２．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物のまわりに足湯や畑があり、玄関前にベンチと花を植えたプランターを置いている。ロビーには観葉植物の鉢、胡蝶蘭があり、エレベーターを出るとホームの玄関として柵がある。居間兼食堂は広く、全面ガラス戸から明るい陽が差し込む。居室の外はバルコニーになっており、外の竹やぶから頭を出している竹の子や川原の土手に芽を出している野草や小さな花を見ることができる。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は洋間で、ベッド、整理タンス、衣装かけ、座り机、椅子、テレビ等、使い慣れた家具が持ち込まれている。足ふみミシンをもってきて使っている利用者もいる。机の上には本や雑誌、書きかけのメモ、ノート、大きな夫の写真の前に花と水、壁には孫娘の結婚式の写真、自分が描いた水彩画等がかけられており、どの部屋も個性的である。		

社団法人京都ボランティア協会2008